三年ぶりの眼蔵会を終えて

加茂法話会　令和四年七月二十九日

一、縁起は行持なり、行持は縁起せざるがゆゑにと、功夫參學を審細にすべし。

正法眼蔵「行持上」の巻より

□縁起は行持する

←

具体的には、釈尊がこの世に出現し、難行苦行され、世の中の有りようや、人間のあるべき生き方に目覚められた。そのような縁によって、今の私たちの行持がある。

二、此度の眼蔵会に参加された梶原輝寿・恵都子御夫妻。

恵都子氏の弟・山本悟由師は、永平寺で同安居。

永平寺での呼び名は、号の「道淳」。

瑞應寺専門僧堂の前堂頭・楢崎通元老師(今月二十五日に九十八歳で遷化)の法嗣。

「定林寺八世再中興道淳悟由大和尚」　平成二十二年四月十九日に遷化

翌二十三年六月二十一日、愛媛県へ特派布教の折、定林寺様をお参りし、恵都子氏に今年の寺報と眼蔵会案内をお送りした処、是非参加したい。

六日～九日まで、滞在。七日、八日、九日の暁天坐禅・朝課にも参加された。

□行持は縁起せざるがゆゑにと、功夫參學を審細にすべし。

←

自らの発心があっての行持。

仏法の行持は、放っておくだけでは縁起しない(つながらない)、自らの発心・修行によってはじめて縁起する(つながる)。自然に行持がなされているわけではない。

功夫參學を審細にすることが、大切ではないか。

三、寒苦をおづることなかれ、寒苦、いまだ人をやぶらず、寒苦、いまだ道をやぶらず。

ただ不修をおづべし、不修、それ人をやぶり、道をやぶる。暑熱をおづることなかれ、暑熱、いまだ人をやぶらず、暑熱、いまだ道をやぶらず。不修、よく人をやぶり、道をやぶる。

正法眼蔵「行持下」の巻より

東龍寺住職　渡邊宣昭　合掌